

メルヴィルの『タイピー』試論 —「文明」か、「野生」か—

森 祐 司

I

6か月間を捕鯨船「ドリー号」(the *Dolly*) 上で過ごした語り手トムは、焼けつく太陽のもと、「頭上には空、周りは海、それ以外には何もない」(The sky above, the sea around, and nothing else!)(¹) 単調な海上生活に対する不満をぶちまける。食べ物すらろくに残っていないのだ。“—what would ye say to our six months out of sight of land?” (p. 1)

メルヴィル (Herman Melville) の『タイピー』(*Typee*) は、このような語り手の海に対する一種の嫌悪とも言える感情の吐露によって幕を明ける。海への反感はそのまま上陸への希求となり、「楽しき陸地」(the merry land, p. 3) への願望となる。目指すところはマーケサス諸島 (The Marquesas)。そして、いよいよここでの未知なる経験、タイピーの谷への冒険の物語が始まるのである。

4か月にわたるヌクヒーヴァ島 (Nukuheva) での体験はまことに波乱万丈、「不思議でロマンチック」(²) なものであった。トーピーと謀っての船からの脱走、食人族タイピーとの出会い、彼らとの生活へと、物語は野蠻人と恐れられていたタイピー族が意外にも親切で人情味のある部族であったことの発見を中心的なテーマとして語りつつ、彼らの一種理想郷的な社会の裏に潜んでいる野生の持つ脅威といったようなものを物語のサスペンスとして描きながら展開していく。タイピー族への脅威はやがて「食人」という行為への具体的な恐怖へと変わっていき、トムを逃亡計画へと駆り立てることになる。障害、失敗を重ねたすえ、やっとの思いで船の待つ海辺へと辿りつくことができた彼は、4か月ぶりで再び見ることができた海のその姿に思わず感嘆の声を上げる。

Oh glorious sight and sound of ocean! with what rapture did I hail you as familiar friends!

(p. 334)

あの退屈でいまいましかった海、そこで縁なす陸地をあれほどまでに乞い願った海がいまやこれ

程までに懐かしいとは。

ここに表わされた語り手の海に対する異なった2つの感情は、ただ単に相反する態度の表明なのではない。我々は、これを一つの「変化」——つまり、登場人物である語り手の内部に起こったある「変化」——であるという具合に考えてみるのである。すでに我々は、この物語を単なる「旅行記」としてではなく、明確なプロットをもった1つの「物語」として読み、その始まりと終わりに何らかの因果関係を見つけようとする「物語の読み」を知らず知らずのうちに始めているのである。⁽³⁾

海に対するこの態度の変化の意味を探っていくためには、この物語のプロットの大きな枠組となっている2つの「逃亡」——海から島へ、そして、島から海へ——について考えてみなければならぬ。それは、「文明」から「野生」への、そしてふたたび「野生」から「文明」への、円環構造をなす逃亡なのである。⁽⁴⁾ この小論は、メルヴィルの作品における中心的な概念「文明」対「野生」という対立を念頭におきながら、『タイビー』という作品を考え直してみようとする試みである。

Ⅱ

第1の「逃亡」、すなわち、海から島への逃亡は、トムにとっては1つの「冒険」(adventure)であった。船乗り仲間の中なかから道ずれとなるべき人物として選んだトービー (Toby) に、彼は、自分の「冒険」の計画を説明し同行を求める。そして、その原動力となったのは未知なるものに対する旺盛な「好奇心」(curiosity)であった。

My curiosity had been not a little raised with regard to the description of country we should meet on the other side of the mountains...

(p. 53)

しかし、彼がそれに先立って自らの行動を“run away”と名付け、それを起こすことになる原因についていろいろと考えることを見逃してはならない。我々は、2つないし3つの意味付けを彼の「逃亡」にたいして与えることができる。

トムの乗ってきた捕鯨船ドリー号は、人間の支配・被支配の関係のハイアキを示す1つの社会の縮図となっている。⁽⁵⁾ いったん契約を交わした乗組員たちはそこではまるで奴隷のようにこき使われ、食べ物もろくに与えられず、病気にでもなろうものならまったく無視されるといった有様なのだ。そして、「この虐待の張本人」(the author of these abuses, p. 25)こそが船の船長キャプテン・ヴァング (Captain Vang) なのである。別のところで語り手は、野蠻人たちの住む島内へと向かう冒険の危険性について思いを巡らすとき、この船長について皮肉混じりに

回想する。

I knew that our worthy captain, who felt such a paternal solicitude for the welfare of his crew, would not willingly consent that one of his best hands should encounter the perils of a sojourn among the natives of a barbarous island...

(p. 38)

船上での虐待から逃れたいという思いはこの「父なる」(paternal) 船長からの逃避願望と相まって、トムは被支配状態への嫌悪へとつながっている。そして、乗組員たちに1日陸へ上がる「自由」(liberty) をあたえてくれる「りっぱな」(worthy) 船長の目を盗んで、トムとトービーはまんまと逃亡を敢行するのである。(chapter VI)

この〈父〉と〈子〉の関係として表わされる船上でのハイアラキは、そのまま、ヌクヒーヴァの港に押し寄せているフランス軍艦に代表される「文明」の抑圧力へのアナロジーとして考えることができる。⁽⁶⁾ ヌクヒーヴァ島は美しい自然に恵まれた島であり、船乗りたちはその港を訪れるのが大好きだった。(In the bay of Nukuheva was the anchorage we desired to reach. p. 13) しかし、いざ入港してきた彼らを待っていたものは、いかめしく国旗をたなびかせたフランスの船団だったのである。(…but that beauty was lost to me then, and I saw nothing but the tri-colored flag of France, trailing over the stern of six vessels, …p. 13) 語り手は、すでにフランスの手に落ちたタヒチやサンドウィッチ諸島の様子へと話を脱線させながら、これらの島々が文明の「専政」(tyranny) によっていかに腐敗、墮落の状態に落しめられたかを熱心に語る。(chapters I, II, III, IV)

腐敗、墮落した「文明」の秩序から脱出すること、この「逃亡」の第2の局面は、「野生」のなかにある優位性への探求という第3の局面へとつながっていく。言換えれば、これは、例えば船長の言 (pp. 44-45) の中に示されているような島に住む「野蛮人」たちへの「文明人」たちの偏見に対して、その真の姿を見極めようとする「真実の探求」にほかならない。その意味でこれは、第2の局面の裏返しであるとも言えることができる。

結果として分かることになるのであるが、この「探求」とは結局、「黄金の島」への、あるいはまた「楽園」への探求であった。⁽⁷⁾ トムが遭遇した食人種タイビー族は、確かに食人の風習は持っているがそれはただ戦った敵の死体だけであり、ほかの点ではまことに「人情味のある徳の高い」(humane and virtuous, p. 277) 種族なのだ。ここではこの「楽園としての島」ということに関して最も重要な箇所であると思われる第26章と第27章にある記述をいくつか見てみよう。⁽⁸⁾ まず、一妻多夫制という文明人から見れば風変わりな婚姻制度は、根本的にまったく自由な恋愛感情のもとに成り立っている。(This,.... is a mere frolic of the affections, and no

formal engagement is contracted., p. 257) そして、婚姻制度による拘束 (the matrimonial yoke) などとはまったくといってないのだけれど、彼らの家庭生活はいっこうに乱れることなく続いている。(A baneful promiscuous intercourse of the sexes is hereby avoided, and virtue,..., is, as it were, unconsciously practised., p. 258) それというのも、彼らの社会にはこれといった法律といったものがないのである。(p. 269) 彼らは、人間に本来備わっている「一種の暗黙のうちの常識による法律」(that sort of tacit common-sense law) に従って、「何が正しくて何が立派なのか」(what is *just* and *noble*) をちゃんと知っているのだ。(p. 270) あたかも自然の恵から谷全体を所有しているかのように (...hold their broad valleys in fee simple from Nature herself, p. 271) 彼らは何の不自由もなく生活を享受している。このように、他との交流をほとんど絶たれているタイビーの谷でトムが見たものは、文明に侵されていない自然の社会がいかに優れて理想的であるかということであった。彼の「逃亡」はまさにこの「真実の探求」の旅だったのである。

Ⅲ

さて、それではこのような「理想郷」に滞在していたトムがどうしてそこからの「逃亡」を再び試みなければならなかったのだろうか。第1の逃亡のなかに支配・被支配のハイアラキからの脱出、腐敗した文明社会からの脱出、そして野生の文明に対する優位性という真実の探求といった意味合いを見てきた我々は、ここで第2の逃亡、つまり島から海への逃亡に目を転じなければならない。

すでに述べたようにこの第2の逃亡の直接の契機となったのは、トムの食人という行為に対する恐怖であった。ハッパー族 (Happar) との戦いの勝利を祝い祭りの際、とうとう彼は未だ血の乾いていない人間の頭蓋骨がカヌーで運ばれるのを見てしまい。(p. 320) 彼が舟に掛けられていた覆いを取ろうとしたとき、酋長たちはそろって、“Tabbo! tabbo!” と声を上げる。そして、彼の身の回りの世話をしてくれているコーリー・コーリー (Kory-Kory) という男は、“Puarkee! puarkee!” (pig, pig) と言って何とかその場を繕おうとする。しかし、彼ははっきりと見てしまったのだ。彼はこれ以来必死に逃亡のことを考えるようになる。

この直接的な恐怖という原因の背後には、しかし、そこに収斂していく形でテキストに散らばっているさらに意味深い逃亡への原動力を見付け出すことができる。それはタイビーの谷でトムが目にするようになる、「入れ墨」と「タブー」に代表される野生の民の風習、制度である。確かに彼は、タイビーが非常に友好的であったこと、そして、彼らの社会の仕組みがかなりの点で「理想郷」に近いということを悟ることになる。さらに、数名の酋長たちを頂点としたハイアラキは存在するが、それは腐敗した文明社会におけるそれとはまったく異質なものであることも体

験する。しかし、4か月間の滞在のうちに、トム内部では確実に新たな抑圧的秩序・制度が生まれ、その重圧はだんだんと耐えられないものになっていくのである。トムは、タイビーの谷に連れてこられた翌日、いまだ彼らの本性を決めかねて不安な面持ちでいるとき、そこに入ってきた戦士らしき男の体に彫られた入れ墨に目を奪われる。(p.104)しかし、彼らにとってはあたりまえのこの「装飾」(ornament)も彼には少々不気味なものだったらしい。美しい島の女ファウェイ(Fayaway)のすべすべした肌にもこの入れ墨をみつけたときのことを、彼は次のように述懐する。

Were I asked if the beauteous form of Fayaway was altogether free from the hideous blemish of tatooing, I should be constrained to answer that it was not.

(p. 115)

ただしかし、この「恐ろしい入れ墨の傷」が女たちの場合はまだわずかであったことがせめてものすくいとなる。(p.116)

ある日とうとう彼自身がこの入れ墨をさせられそうになったとき、この気持はいよいよ現実味を帯びたものとなる。入れ墨の芸術家(the Artist)カーキー(Karky)が、彼の行くところ行くところを追い回し、彼の白い肌に入れ墨をしたいと申し出るのだ。(The idea of engrafting his tatooing upon my white skin filled him with all a painter's enthusiasm :, p. 294) 必死の抵抗のすえやっとのことで辛うじて難を逃れることのできたトムの心のなかには、確実に一つの変化が生れた。彼はもはや谷での生活を楽しむことができなくなってしまったのである。

Hardly a day passed but I was subjected to their annoying requests, until at last my existence became a burden to me ; the pleasures I had previously enjoyed no longer afforded me delight, and all my former desire to escape from the valley now revived with additional force.

(p. 296)

語り手がこの事件の記述のすぐ後に「タブー」(taboo)について考察することは、この2つの項目の重要な関係を示唆する点で興味深い。彼は、この谷に滞在中何度となく'taboo'という言葉を目にしたことを思い出す。(p.300)それは、彼にとって「説明できない」(inexplicable)言葉であり(p.297)、「運命的な」(fatal)言葉であった(p.299)。「タブー」という言葉は、彼を当惑させ、彼が「別世界」にいるのだというという疎外感をつのらせる「呪の言葉」だったのである。

I cannot determine, with anything approaching to certainty, what power is it that imposes the taboo.

(p. 302)

「入れ墨」と「タブー」とが表わすこの抑圧の感覚と疎外感は、トムスの「逃亡」の原動力となっている。食人の行為への恐怖はそれを促す起爆剤のようなものだったのである。『タイビー』の中での2つの逃亡の意味について考えてきた我々は、ここで語り手トムスの「逃亡」という行動原理のなかに潜む重大な特徴を言い当てることができる。すなわち、トムスを2つの逃亡に駆り立てる力は、ともに「抑圧」「被支配」「拘束」といった力に対する反発の力だったのである。一言で言えば、それは非常にアメリカ的、あるいはアメリカにわたってやって来たピューリタンの「旅」の原理ではないか。⁽⁹⁾ 海から島へ、さらに島から海へと繰り返される彼の逃亡は、つねに「とらわれの状態」(the state of captivity, p. 310) からの脱出なのであり、新しい「楽園」を求める直線的な方向性をもった「巡礼」の旅だったのである。

〈海〉→〈島〉→〈海〉という冒険旅行は、「文明」から「野生」へ、そして再び、「野生」から「文明」への円環構造を成す旅であった。しかし、そこには上述のようなまさに直線的な方向性が内包されている。我々はここで今一度、海へ戻ろうとするトムスの願望と、この作品の結末に見られるこのアンビバレントな側面との関係について考えてみなければならないであろう。

IV

『タイビー』の中での「海」は、文明社会の縮図である「船」の浮かぶ場である。そのように考えてみると、タイビーの谷からの脱出のすえ久し振りに海を見たトムスの感激は、作品の中でしきりに礼賛してきた「野生」の美德に対する感情と真っ向から対立するものとなる。処女作としてのこの作品の未熟さに対する、さらにははっきりとえば、この作品の結末のあり方に対する不満の声が上がるのも、もっともなことであろう。⁽¹⁰⁾ 海へ再び帰ることは「楽園」の放棄なのである。「楽園はあくまでも楽園でしかなく、たとえば人喰いの風習というような否定的側面がはいりこみ、処を得る余地はない。」⁽¹¹⁾ ひたすらに脱走しようというトムスの行動は、まったく理解に苦しむ無謀な行動と考えられるのである。ここまで極論をしないまでも、この作品の「未熟さ」は、結末によってはっきりとなる「文明」と「野生」に対する価値観の「曖昧さ」を指摘することで十分となる。すなわち、チャールズ・フィードルソンのように、トムは、『『文明』と『野生』の意味を決めることができない」(...cannot decide the meaning of "civilization" and "savagery") と考えることも十分うなずけるのである。⁽¹²⁾

しかし、ここでは、この結末を不当なものであると片付けてしまふまえに、トムスの逃亡の意味をもう少し考えてみたいと思う。すなわち、物語のプロットとしてのこの結末のアンビバレンス

が、「文明か、野生か」という選択の曖昧さに落す陰を探ってみたいのである。

問題の第2の逃亡、すなわちヌクヒーヴァ島からの脱出は、はたして本当に「命懸けの逃亡」⁽¹⁵⁾と呼べるようなものだったであろうか。このあたりのところを物語をたどりながら少し見ていこうと思う。

とらわれの身から何とか逃げ出したいと考えるトムは、鬱々として逃亡計画を練るが、なかなか思うようにことが運ばない。しかし、とうとうチャンスが訪れた。行方不明になっていたトービーがヌクヒーヴァの港にやって来たという噂が舞い上ったのである。これを見逃す手はないとばかりに、彼は、本心を気取られないようにして、トービーに会いたいのので海まで連れていってくれるように頼もうとする。すぐには受け入れられなかったが、必死の懇願のすえ酋長のひとりであるメヒーヴィ (Mehevi) は、やっとのことでそれに同意する。(Again and again I renewed my petition to Mehevi., p. 330) ところが、肝心なときになって前に痛めた足が再びいたくなり一人では歩くことすらできなくなってしまった。そこで、皆の助けを得て、背負われおぶわれて何とか海に向かうこととなる。ところが、もう少しで海というところに来て、その噂がまったくのデマであることが分かってしまう。彼の海へ出る理由はなくなり、引き返そうとするタイビーを前に、彼は次のように決心する。

I could gain nothing by force....it was by entreaty alone that I could hope to compass my object.

(p. 332)

そして、別の酋長であるモウ・モウ (Mow-Mow) に必死の懇願を繰り返すが、ここでもなかなか受け入れてもらえない。そのとき彼を救ったのが、谷にいる間ずっと世話になっていた家の家長であるマーヒーヨウ (Marheyo) であった。彼は、トムが教えた“Home” “Mother” という英語を繰り返し (p. 333)、彼の心のうちをちゃんと見抜いていたのだ。彼の助けを得てやっとの思いで海に辿り着いたトムは、港に来ていたフランスの軍艦レイン・ブランシュ号 (the Reine Blanche) の乗組員とタイビーたちとの小競り合いを機に、何とか船に逃げ込むことに成功する。

背中に抱がれての逃亡、懇願に懇願を重ねたすえの逃亡、さらに、逃亡しようとするまさにその相手による手助け、といったこの逃亡の性質は、船に乗り込んだ際の場面を見ることでさらにはっきりとする。気が付くと彼の周りにはマーヒーヨウとコーリー・コーリー、そして愛し合った島の娘ファヤウエイ以外には誰もいなくなった。彼らの目には涙が浮かんでいる。彼はファヤウエイと別れの抱擁を交わし、男たちに別れの品を授け、後ろ髪を引かれる思いで船に乗り込む。次に引用するのは、船に乗り込んだトムと彼らとの最後のシーンである。

I handed the musket to Kory-Kory, with a rapid gesture which was equivalent to a 'Deed of Gift'; threw the roll of cotton to old Marheyo, pointing as I did so to poor Fayaway, who had retired from the edge of the water, and was sitting down disconsolate on the shingles;...

(p. 337)

これはどうも「逃亡」のシーンとは思えない。どう見ても「惜別」のシーンなのである。はたしてここにどのような意味を読み込んだらいいのであろうか。

思えば、トムが彼ら3人に感じる惜別の情というのは、物語の展開のうえではまことに自然な成り行きだったのかもしれない。怪我をして動くことができない彼をマーヒーヨウ、ユーリー・ユーリーの親子はまことに献身的に世話してくれた。そして、美しいファウエイとはまさに恋人同士のような関係にあったのである。しかし、ここで注意しなければならないことは、この彼らに対する親しみ、愛情から生れる後ろ髪を引かれるような思いというのは、第2章で示したトムの心のなかにある直線的方向性、つまり拘束からの脱出、非支配からの逃亡、とはまったく逆の方向性を示している点である。結末に用意された「逃亡」は、確かに、抑圧、あるいはとらわれの状態からの逃避、また、野性のなかに潜んでいる得体の知れない恐怖からの脱出といった側面を持っている。これは、「島」から「海」へ、言換えれば、「野生」から「文明」へという方向性をもった逃避行である。しかし、今見てきたように、トムの心のなかには、それとは逆の方向性、つまり「島」に残りたいという後ろ髪を引かれるような気持が存在していることを忘れてはならない。実際行動としての乗船（つまり「文明」への帰還）と相矛盾する惜別の情との生み出すアンビバレンスはこの作品の示す「文明か、野生か」という選択にかかわる問題なのである。

V

結論から言えば、この惜別の情に示される方向性は決して「野生」への回帰、つまり、作品中に示された「野生」の「文明」に対する優位性に対するトムの認識にそのまま通じる後戻りの方向性ではない。つまり、ここで働いている力とはトム自身が持つ「自由」への欲望のちょうど裏返しとなって作用する「支配すること」への願望なのである。

マーヒーヨウ、ユーリー・ユーリーの親子は、トムのタイビー谷での滞在中、足の負傷による移動の抑制、タブーの圧力からの抑制という圧力のなかで、彼に少なからず「自由」を与えてくれた。マーヒーヨウの家にいる間彼は十分な食べ物と医者の治療を受けることができる。彼の治める家は、ヴァング船長の「船」とはまったく対称的な空間なのである。

But despite his eccentricities, Marheyo was a most paternal and warm-hearted old fellow, and in this particular not a little resembled his son Kory-Kory.

(pp. 112-13)

ここでの「父親」は慈愛あふれる「父親」なのである。そして、この「父親似」の息子ユーリー・ユーリーの献身ぶりはといえば、さらに注目に値する。彼は、トムが行きたいところへはどこにでも彼を背負って連れていってくれるのだ。そして、彼の言い付けにはまったくの盲目的服従をもって応えてくれるのである。

トムとユーリー・ユーリーとの関係とその深い友情に似た絆を持っている点で『モービー・ディック』(*Moby-Dick*)の中でのイシュマエル (Ishmael) とクイーケグ (Queequeg) との関係とのアナロジーとしてとらえることもできるかもしれない。⁽¹⁴⁾しかし、決定的に違っている点は、トムがその献身的な「野蛮人」にたいして知らず知らずのうちにも、主・従というハイアラキの意識を持ってしまっている点である。語り手トムは、彼の外見上の奇妙さを述べた後、彼の世話にたいして忘れられない感謝の意を捧げる。

Kory-Kory, I mean thee no harm in what I say in regard to thy outward adornings; but they were a little curious to my unaccustomed sight, and therefore I dilate upon them. But to underrate or forget thy faithful services is something I could never be guilty of, even in the giddiest moment of my life.

(pp. 111-12)

この感謝の気持は友情といった感情と取り違えることはできまい。さらに決定的なことに、ユーリー・ユーリーを我々に紹介する際、語り手は、「我が忠実なる召使」(my trusty body-servant, p. 108)と呼んでいるのである。⁽¹⁵⁾

この「支配する」ことへの願望は、何らかの形で自らを取り巻く「野生」の世界の秩序への抵抗という形となって表われるようにも思われる。トムにとってそれは「タブー」への挑戦という形で表われた。ある日彼は、「女は舟(カヌー)に乗ることはできない」というタブーに戦いを挑む。彼は、ファヤウエイと一緒に舟に乗りたく申し出るのである。(chapter 18)これには当然ながら大反対となるのだが、マーヒーヨウの必死の説き伏せにも彼はまったく動じない。1つには言葉があまり通じないということもあったけれども、彼にはどうして女だけが舟に乗ってはいけぬのかどうして男なら乗っていいのだ。(I could not understand why a woman should not have as much right to enter a canoe as a man., p. 177) 彼はとうとう承諾を得ることに成功し、ファヤウエイとの船遊びを楽しむことになる。

ここに見られるのはまことに奇妙な構図である。トムは、やがて自らが耐えられなくなっていくタイビーの社会という抑圧、拘束の空間のなかに、自らが「主人」となるもう1つの「小世界」を築いているのだ。そして、その世界の中での原理でもって周りの世界の秩序を突き崩していくこととするのである。コンテクストを広げてみれば、これもまたあのビューリタンの末裔であるアメリカ人船乗りのトムが、「楽園」の追求にさいして持っている歴史的なる矛盾なのではなかったか。⁽¹⁶⁾ すなわち、楽園を追求し、「ここに見つかり！」という楽園への願望は、トムの自らの小世界建造によって内から突き崩されることになり、必然的な楽園喪失への道を歩まねばならなくなったのである。彼は、「野生」のなかに1つの「楽園」を見出したと思った。それは、「野生」の「文明」に対する優位性を証明するものであったはずだ。彼は、『タイビー』という物語を語ることによって文明と野生との間にあるハイアラキを「転覆」させようと考えたのである。しかしそこには明かにもう1つの力が働いている。それはまさに「転覆の転覆」とでも言える突き崩しの力なのである。⁽¹⁷⁾ 『タイビー』のはじめと終わりに見られる「海」に対する態度の変化は、トムの「逃亡」に見られる意識のアンビバレンスにつながっている。そして、それは彼の「野生」に対する認識にとって重大な陰を落しているのである。それでは一体その陰とは、つまり、そこに働くもう1つの力とはどのようなものであったのだろうか。

VI

その力は、おそらく物語のプロットを越えたところにある語り手の無意識の領域、言換えれば、語り手の「語り」(narrating)のレベルとでも言えるところで働いているように思われる。⁽¹⁸⁾ 語り手としてのトムの問題がここで浮かび上がってくるのである。ここで1つのエピソードを見てみることにしよう。

語り手は、マーケサス諸島に押し寄せる「文明」の脅威を語るうちに文明人たちがいかに愚かに「野生」の世界と接しているかというエピソードを語り始める。ある宣教師が、島民たちの改宗のために彼らの敏心を買う必要を感じて自分の美しい妻をさらに美しく着飾らせて彼らのまえに連れていく。初め、その美しい「もの」がなにかしら聖なるものに映ったのか、驚異の目を見張って眺めていた島民たちは、その本性を見極めようとするかのようにじっと見つめている。しかし、やがて、それがただの人間の女であることが分かると、二度とこんな「見せかけの騙し」をするなど言わんばかりに彼女の着ていた服を剥取り彼女に罵倒の声を浴びせかけたのである。

これは、第1章に出てくるエピソードであるが、文明社会、とりわけ宗教界の腐敗と、女性の外観を「道具」として用いようとする文明自体の墮落性を示す典型的な例であろう。注意しておかなければならない点は、この話が語り手自身の経験したことではなく、彼が到着する少し前に

起こったことを誰か人から聞いた話であるという点である。したがって、彼は、“It seems...” (p. 6) という形で話を進めているわけである。つまり、このエピソードは、この物語が目指している事実の記述ではなく、語り手によって何らかの意図のもとに語られた1つの意見なのだということになる。その意図とは、文明の腐敗への非難であり、また逆に、島民たちが「外形」よりも「中身」を見ようとするに示された「野性」の美質を指摘することであった。

島民たちが宣教師の妻の衣服を剥取るという行為はまことに象徴的な行為であった。それは、あたかも文明そのものの「外皮」を剥取ることのようだったのだ。さらに、これは、もう1つ別の事実をも示している。それは、島のものたちが女という「性」にたいして持っている意識である。すでに見たように、女たちは舟に乗ることを許されていない。それは「タブー」の1つなのである。また、「タブーの森」(the Taboo Groves) と呼ばれる「聖なる」領域は女人禁制であり、盛大なお祭り「ひょうたん祭り」(the Feast of Calabashes) も男中心のものとなっている。こういったいわば男性中心の島の「制度」にトムが挑戦したことはすでに述べた。しかし、男女の平等というトムの持つ価値観がはたしてタイビーたちに必要であったかどうかは疑わしい。彼らの結婚の制度の素晴らしさを語ったのは彼自身だったのである。(pp. 257-59)

「文明」のモラル対「野生」のモラルという対立において、語り手トムはあくまでも自分の属す側のモラルに縛られざるをえない。これは、この物語の「語り」にとって決定的な意味をもつこととなる。語り手の目は、どうしても文明の側からものを見ることになるのである。

トムにとってファヤウエイという女性はまことに美しい、エロティックな存在である。ファヤウエイだけでなく、島の女たちはみな彼の目には非常にエロティックに映るのである。典型的な場面として、港に着いたドリー号にまるで人魚のように群がり押し寄せてくる半裸の女たちを描くところがある。次々と乗船してきたかの女たちは、屈託もなく自由に戯れる。(pp. 16-18) その様子を見たトムは、

What a sight for us bachelor sailors! how avoid so dire a temptation?
(p. 17)

と、おもわず感嘆の声を上げてしまう。彼にとっては、島の女たちは明かに「性」の対象として映るのである。事実この物語には、女性の外形に対する記述がかなりの割合で目だっている。⁽¹⁹⁾ 彼女たちは、ちょうど「タブー」によってある1つの社会から閉め出されているように、トムの物語の中ではまったくの周縁に押しやられているのである。これは、文明社会における一つの根本的な支配・被支配の構造である男性/女性というハイアラキへの語り手の執着を如実に物語る事例であると言えよう。⁽²⁰⁾ トムの目は明かに、文明の側から注がれているのである。

また、島の女たちは、トムの目には思いのほか色白に映ったようである。

During the festival, I had noticed several young females whose skins were almost as white as any Saxon damsel's, a slight dash of the mantling brown being all that marked the difference. This comparative fairness of complexion, though in a degree perfectly natural, is partly the result of an artificial process, and of an entire exclusion from the sun.

(p. 245)

彼らは、「パパ」(Papa)の根から取った樹液を顔に塗ることで、太陽光線を避けるという「人為的」な操作で肌を白く保っている。そしてトムには、それが「サクソン系の白人のように」白く見えるのである。このように、彼の目は「野生」を見ながらそこに「文明」を見出すといったような目なのである。

『タイビー』のなかでの女性の描写を見てみると、そこには語り手の無意識のうちの内部分裂が見事に映し出されていることに気がつく。すなわち、彼は「野生」を賞美しつつも、同時にまた自らが「文明」のなかに属していることを語ってしまうのである。彼が「野生」のなかに築きあげた「小世界」は、まことに「文明」の縮図だったのである。

「野生」のなかに「文明」を見つけること、「野生」のなかにもうひとつの世界を築くこと、『タイビー』の語り手が「文明」と「野生」の転覆を謀るこの物語を語るうちにしてしまうことになるこの陰の力を、結末の場面は象徴的に表わしている。マーヒーヨウ、コーリー・コーリー、そしてファヤウエイとの涙の別れは、トムが「野生」のなかに見た「文明」の小世界にたいしての惜別であったのかもしれない。トムは、この物語を語ることで、丁度彼が初めて島に着いたときに嫌悪の念で見たあのフランス軍艦と同じように、「野生」を文明化しようとする自分を暴露してしまうのである。結末に示された「逃亡」と「惜別」のアンビバレンスは文明と野性の意味を恐ろしいほどに体感した語り手のひとつの策略だったのだ。「文明か、野生か」という問は、文明人であるトムにとってはまことにアイロニカルな意味合いをもって響くのである。

注

- (1) Herman Melville, *Typee: A Peep at Polynesian Life During a Four Months' Residence in a Valley of the Marquesas, with Notices of the French Occupation of Tahiti and the Provisional Cession of the Sandwich Islands to Lord Paulet, and a Sequel, the Story of Toby*. in *The Works of Herman Melville*, Standard Edition vol. 1 (New York: Russell & Russell, 1963), p. 1. 以後この作品への引用ページ数は引用文末に記す。
- (2) "...and many things which to fireside people appear strange and romantic,..." (Preface, p. vii).
- (3) この「物語」がフィクションとして再評価されるようになった経緯については、Charles Roberts Anderson, *Melville in the South Sea* (New York: Dover, 1966), pp. 179-95 を参照。
- (4) 『タイビー』における「海」と「陸」の空間的対比によって生れるシンボリックな意味については、Charles Feidelson, Jr., *Symbolism and American Literature* (Chicago: Univ. of Chicago Press,

- 1953), pp.164-66 を参照。
- (5) Robert K. Martin, *Hero, Captain and Stranger: Male Friendship, Social Critique, and Literary Form in the Sea Novels of Herman Melville* (Chapel Hill: Univ. of North Carolina Press, 1986), pp.27-28 を参照。なお、メルヴィル自身の船上での「庄政」の経験については、Leon Howard, *Herman Melville: A Biography* (Berkeley: Univ. of California Press, 1951), pp.41-60 を参照。また、一般的背景としては、Sacvan Bercovitch & Myra Jehlen, eds., *Ideology and Classic American Literature* (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1986) を参考にした。
- (6) Martin, p.25.
- (7) 『タイビー』のテーマを「樂園」への探求と見る見方については、Anderson, pp.117-78, 酒本雅之, 『砂漠の海—メルヴィルを読む』(東京・研究社, 1985年), pp.51-75 を参照。
- (8) 「樂園」「島」などについての一般的概念については、川崎寿彦『樂園と庭』(東京・中央公論社, 1984年), 同「遠い島はるかな想い」, 『名古屋大学文学部研究論集』Vol. 70 (1977年3月), 231-54 を参考にした。また、バストラリズムという観点でメルヴィルを扱っている、Leo Marx, *The Machine in the Garden: Technology and the Pastoral Ideal in America* (London: Oxford Univ. Press, 1964), さらに、具体的な定義の問題は、Bryan Loughrey, ed., *The Pastoral Mode*, Casebook Series, (London: Macmillan, 1984), pp.77-180 を参考にした。
- (9) ビューリタンの先へ先へと進む方向性については、William Haller, *The Rise of Puritanism* (New York: Harper & Row, 1957) を、また、アメリカにおけるビューリタニズムについては、Charles Berryman, *From Wilderness to Wasteland: The Trial of the Puritan God in the American Imagination* (New York: Kennikat, 1979) を参考にした。
- (10) William E. Sedgwick, *Herman Melville: The Tragedy of Mind* (New York: Russell & Russell, 1962; rept. of Cambridge: Harvard Univ. Press, 1944) pp.19-36, および、酒本, pp.74-75 を参照。
- (11) 酒本, p.75.
- (12) Feidelson, p.322.
- (13) 酒本, p.74. なお、Leo Marx もこの最後の「逃亡」について、“an act of violence to escape from the “freedom” of nature” と言い、トムが「樂園」を捨てるという見方をしている。Marx, p.285 を参照。
- (14) Martin, p.19.
- (15) 「召使」(servant) という呼び方は以後もしばしば使われている。
- (16) これは Haller が “reformation without tarrying” と呼んだビューリタンの性向の延長線上にあるものと考えられる。Haller, pp.173-225 を参照。
- (17) 「転覆」という概念については、Jonathan Culler, *On Deconstruction: Theory and Criticism after Structuralism* (London: Routledge & Kegan Paul, 1983) を参考にした。
- (18) 「語り」(narrating) とは語り手の語る行為のことである。Gérard Genette, *Narrative Discourse: An Essay in Method*, trans. by Jane E. Lewin (New York: Cornell Univ. Press, 1980), pp.212-62 を参照。
- (19) たとえば、フヤウエイの容姿の美しさについて (pp.114-17), 池で泳ぐニフのような島の娘たちの描写 (pp.119-20), 娘たちの踊る様子 (pp.204-05), 娘たちの服装、髪の様子について (pp.308-09) など。
- (20) 西洋文明の伝統のなかでの「女性」の問題については、Culler, pp.43-64, K.K. Ruthven, *Feminist Literary Studies: An Introduction* (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1984), pp.59-92 など を参考にした。